

本書を開けば一目瞭然であるが、そのイラストの美しさに目を奪われる。伊藤宏之先生によれば、これらのすべては「手書き」であるというから、二重に驚かざるをえない。これまでに筆者が座右の書としてきた手術書は 2 冊あり、いずれも欧米のものでレジデントのときから繰り返し参考にしてきたものであるが、本書はそれらに勝るとも劣らない内容となっている。伊藤先生とは、10 年ほど前から外科学における技術論に終始するセミナーで年に 3 回ほどご一緒させていただいている仲である。つまり、すでに 30 回以上にわたって彼の肺癌に対する手術に対する考え方、その適応、詳細な技術論、そして術前と術後の管理を議論する機会を得てきたことになる。その 1 回が小 1 時間というものではなく、およそ 8 時間に及ぶ症例検討に基づく議論であった。すなわち、時間にすれば 240 時間以上の議論を彼と展開する機会に恵まれたことになる。このことは筆者にとって計り知れない幸運であり、筆者自身の手術の向上に役立ったことは論を俟たないところである。伊藤先生の論理はきわめて明快で、筋が通っており、それは全国から集まった若手の精鋭を手術の観点から鍛えるという、いわば「松下村塾」のようなものであったのであるが、参加した若い呼吸器外科医たちにも大いに刷り込まれたに違いない。筆者はそのセミナーを通じて彼のイラストの秀逸さを実感していたのであるが、改めて手術書という形で示された本書を拝読して、まさに前人未到の領域にあると感じざるをえなかった。本書のイラストはきわめて緻密に描かれているのではあるが、変に劇画調でもなく、必要とあらば模式図化させて、その理解を容易にするために変幻自在の工夫がなされているのは、型にはまらない、まさに伊藤宏之ならではのといえる。

たとえば、116 ページの中段にみる左肺門のイラストは、彼がセミナーで再三使用していたものであるが、そのよく考えられた構図はまさに写真以上であるといってよい。この断面図を頭にたたき込めば、いかなる分葉不全の肺切除もたやすいのではないか。それに加えて、第 3 章にあるいわば「原理原則」を熟読すれば、まさに鬼に金棒の状態ですべてに臨める。

「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず。彼を知らずして己を知れば一勝一負す。彼を知らず己を知らざれば戦ふ毎に必ず殆うし」と孫子にあるが、本書は「彼」すなわち解剖を知るための絶好の書であり、本書を手元に日々精進することが 10 年後の大きな成長を保証するであろう。まさに呼吸器外科医必読の書である。